

# LISTEN

LIBRARY SERVICE OF TEACHER EDUCATION NEWSLETTER



特集：電子ブック・デビュー

VOL. 10

## 特集：電子ブック・デビュー



フォークでスープは飲めません。スプーンでサラダは食べにくい。

わたしたちは普段、料理に応じて、これらの食器を使い分けています。

で、本もまた、その内容に応じて、紙と電子を使い分けなくちゃならない時代。

と、言えますかね。

たとえば、事典やハンドブックの類なら、全文検索もできる電子ブックに軍配が上がるでしょうし、1日1ページ、極彩色の傍線をほどこしながら読みすすめる哲学書の類なら、やっぱり紙の方がふさわしいかもしれない。

2010年の電子書籍元年から6年。これからも電子ブックが増えこそすれ、紙の本がなくなることはきっとないでしょう。おそらく、きっと。

だからこそ、紙と電子。そのどちらかではなく、どちらも使う。

そんな両刀使いのバランス感覚が、このハイブリッドな情報社会において、強く求められているのです。かね。

実は、かく言う筆者も、根っからの紙派。(ちなみに、カメラはフィルム派)。

紙があるのなら、できればそれに寄り添いたいのが本音だけれど、

最近電子ブックもじわじわと使い勝手がよくなっていると、そんな噂をよく耳にします。

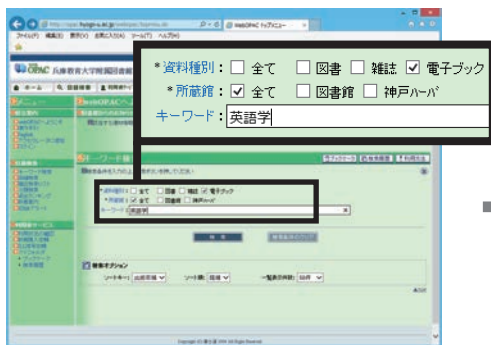
食わず嫌いはつつしんで、ちょっと電子ブックを使ってみることにしました。



## 電子ブックを探す

兵庫教育大学で契約している電子ブックは、紙の本と同様、蔵書検索システム（OPAC）で探すことができます。

①



<http://opac.hyogo-u.ac.jp/webopac/>

②



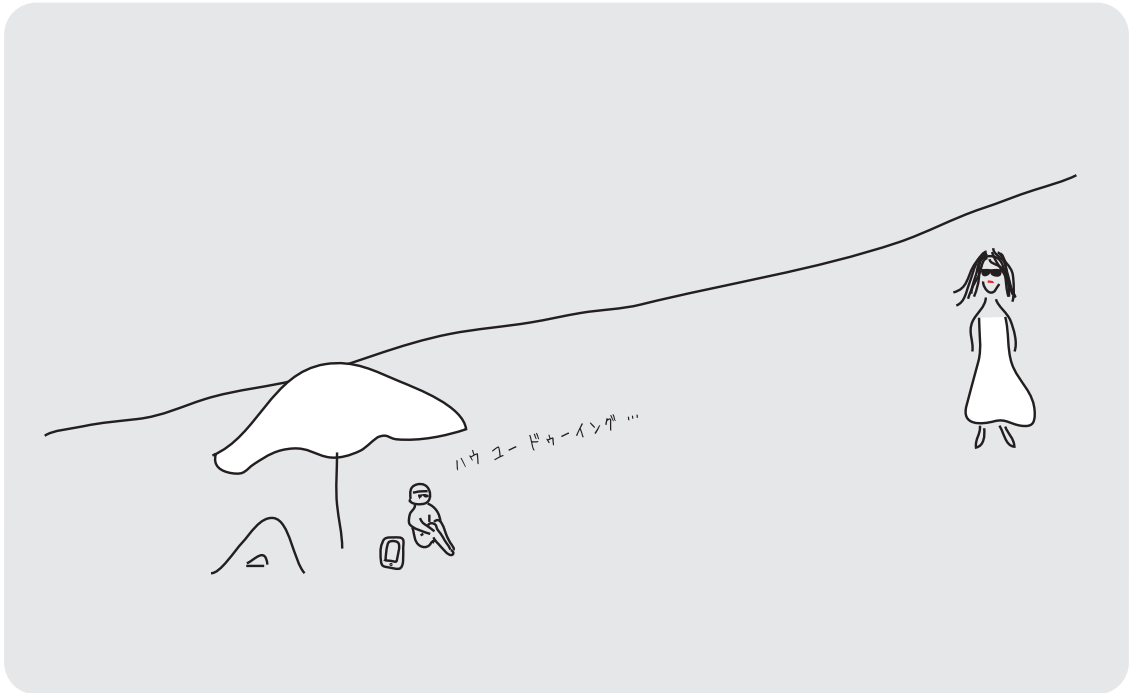
③



- ① 資料種別を電子ブックにし、キーワード検索
- ② 検索結果詳細画面の「本文を読む」欄に表示されるリンクをクリック
- ③ 出版社等が提供する電子ブックのページが表示される  
(図は Maruzen eBook Library の書籍ページ)

検索から閲覧までシームレスに行えるのが、電子ブックのメリット。

OPAC で気になる本を見つけたら、とにかくクリックしてページを開いてみましょう。



## 電子ブックで英語力アップ！

日本人が苦手な英語。その効果的な学習法として、今「英語多読」が注目されています。

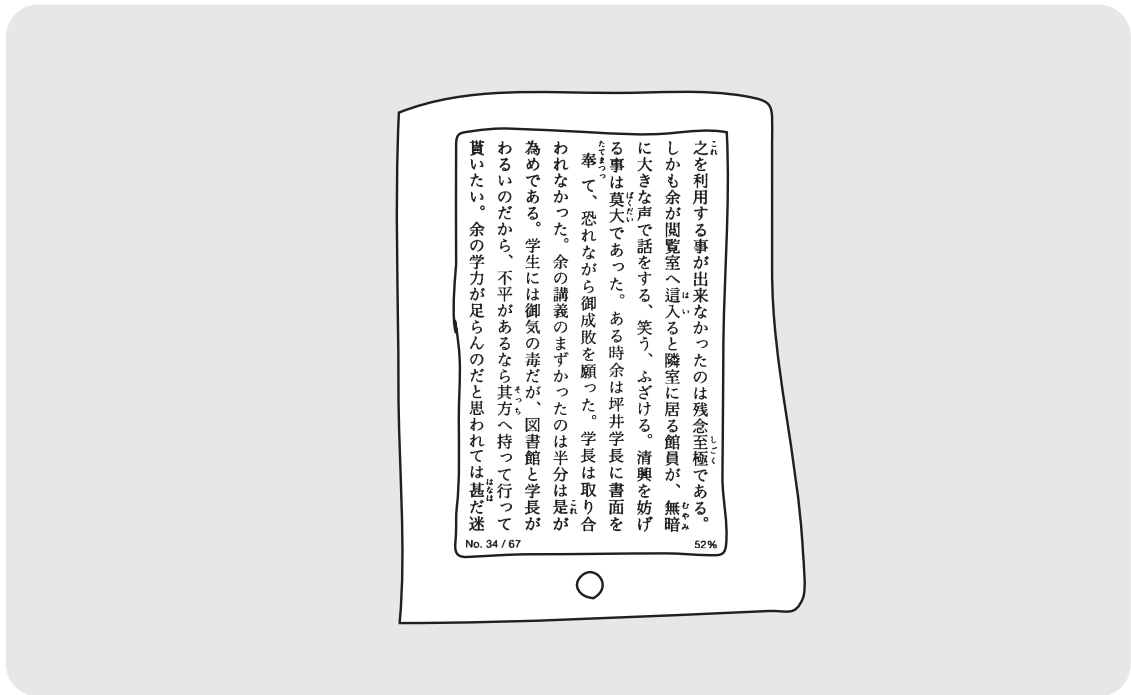
英語多読とは、英語で書かれた小説や物語を楽しみながら、とにかくたくさん読むこと。図書館では、そんな英語多読用の電子ブックを多数揃えています。Gulliver's Travels とか A Christmas Carol とか。電子ブックなので、貸出・返却や持ち運びの手間いらず。いつでもどこでも気軽にアクセスして利用できるのです。多読に適しているといえるのではないのでしょうか。

また、通常紙媒体の図書としては受け入れていない英会話教材、TOEIC など語学試験参考書も電子ブックとして整備。その他、ELT（英語教育）教材や国際理解教育関係のコンテンツも充実し、グローバル化に対応した語学力・コミュニケー

ション力を磨くために必要なラインナップとなっています。

なお、本学が契約する電子ブックは、神戸ハーバーランドキャンパスを含む学内のパソコンからしか利用できませんが、本学のVPNサービスを利用すれば、自宅のパソコンからでも電子ブックを利用できるようになります。VPNサービスは、学外にいながら学内LANと同じ環境でネットワークを利用できるサービス。電子ブックだけでなく、学内LANからのみ利用可能な本学契約の電子ジャーナルやデータベースなども無料で利用できます。VPNサービスの利用方法については、以下のサイトを参照ください。

[http://www.hyogo-u.ac.jp/in/research\\_support/hute\\_packetix.php](http://www.hyogo-u.ac.jp/in/research_support/hute_packetix.php)（学内限定）



## 青空文庫で不朽の名作を楽しむ

「余の講義のまずかったのは半分は是が為めである。」  
「是（これ）」とは、自分の研究の邪魔をするおしゃべりな図書館員とそれを咎めない学長のこと。おまけに、あとの「半分」は、講義中に吠える犬のせいにするしまつ。筆者は、大学教授の職を辞し新聞社員となったばかりの夏目漱石。まさにその『入社辞』の一節です。この文章、わざわざ図書館の書架に眠る漱石全集をひもといたわけではありません。インターネットにつながる環境さえあれば、誰でも自由に読むことができます。提供するの、著作権が切れた文学作品を電子化しインターネット上に無料で公開する電子図書館「青空文庫」。明治から昭和初期にかけての国内文学作品を中心に、現在1万3千を超えるタイトルが公開されており、附属図書館のOPACからも検索できます。吉川

英治の『三国志』やフィッツジェラルドの『グレートギャツピー』といった有名作品が無料で読める楽しみに加え、『入社辞』のように、文豪のマニアックな一品に気軽に触れることができるのも魅力のひとつ。

青空文庫は、Kindleなどの電子ブックリーダーやリーダーアプリ（スマートフォンなどで動作するリーダー）を使い「縦書きビューア」で読むのがオススメ。外出先の空き時間などに少しずつ名作を読みすすめてみてはいかがでしょうか。なお、OPACでは検索できませんが、海外では青空文庫の元祖米国版ともいえるプロジェクト・グーテンベルクや図書館の蔵書をデジタル化するGoogleブックス、ハーティトラストなど、著作権をクリアした書籍のネット公開がさかん。古い洋書を探す際には要チェックですよ。

# 菊地的読書のすすめ

菊地康介。  
修士課程教育コミュニケーションコース2年。  
図書館アルバイト。自身肝煎りの企画「カケル×プロジェクト」が平成27年度課外研究プロジェクトで採択され、その活動の一環として図書館内外でゲリラカフェを好評展開中。丸メガネがトレードマークのちょっと変わり者23歳。

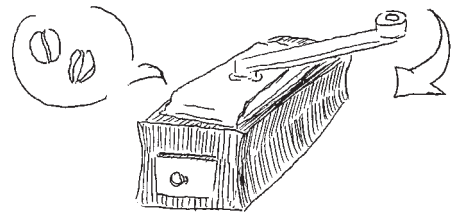


## 菊地流、珈琲の美味しい淹れ方

### 1. 豆を挽く

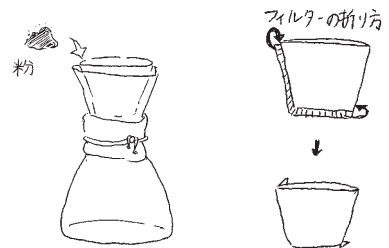
豆は、黒ければ黒いほど苦味が強く、淡い色になるほど酸味が強くなります。

美味しい珈琲は豆の鮮度が決め手。オススメは豆の状態で購入し、飲む直前に必要な分だけ挽くこと。保存はなるべく空気に触れない容器に入れ、冷蔵庫などに。ちなみに1杯は10g程度が目安。美味しくなるコツは、ちょっと多めに豆を挽くことかな。



### 2. フィルターに入れる

たかがフィルターとあなどるなかれ。麻や絹、ステンレスなどもあります。はじめはペーパーがおすすめですが、慣れてきたらいろんなものを試してみたいかがでしょう。粉を入れたとき、トントンと平らにすることを忘れずに。最後に真ん中をちょっとつついて、伝統的なおまじない、「コピルアック」と唱えると美味しくなります。



### 3. 湯を注ぐ

ここが一番難しく楽しいところ。最初に全体が湿るまでお湯をかけて蒸らし（10～30秒程度）、そのあとゆっくり中心を狙って注ぎます。注ぐ量と抽出される量が一定になるように心がけましょう。最後の一滴まで抽出するのはご法度。アクなどの雑味も混じっちゃうので、ペーパーにお湯が残っている状態で、ハイできあがり。





## 菊地が選ぶ、珈琲とともに味わいたい本トップ3



『キッチン』 吉本ばなな著 | 角川書店, 1998

珈琲は自分のお気に入りの場所で飲むのもっと美味しい。自分のお気に入りのところでじっくりと飲む珈琲の味は格別です。「私がこの世で一番好きな場所は台所だ」という書き出しで始まるこの本。「台所」が織り成す、切なくも温かい物語。お気に入りの場所で珈琲とともに読んでほしい作品です。



『深夜特急1 香港・マカオ』 沢木耕太郎著 | 新潮社, 1994

珈琲はそのときどきの環境で味が変わる不思議な飲みもの。主人公は仕事を辞め、全財産をかき集めて旅にでる。そして道中のカジノでの熱い夜の後、珈琲を二杯飲みます。その味はどんなものだったのか。苦かったのか甘かったのか。答えはその珈琲を飲んだ人だけ知っています。この本を読んで旅先で珈琲を飲んでみるとその味がわかるかもしれません。



『ターン』 北村薫著 | 新潮社, 2000

珈琲は毎日の生活の中にひっそりと存在するもの。この本は三時十五分になると前日に戻ってしまう世界が舞台。その中で主人公は翌日に来ない無意味な今日をどう生きるのかが描かれる。毎日を生きたこと。そしてそこにひっそりとある珈琲。繰り返される一日一日をそっと彩ってくれるモノ。今日をどう過ごすか、珈琲を飲んでのんびり考えてみるのも良さそうです。

## LAPの醍醐味



「LAPの醍醐味は何ですか？」と聞かれたら、「参加する面白さ」と「つくる面白さ」だと答えます。

LAP (Learning Activation Project) とは「多様な人たちによる知的交流の場（機会）をつくるために、学生が主体となって取り組む企画づくり」です。学部生・院生で構成されるメンバーが、昼休みや空き時間を利用して、企画や運営の話し合いを進めています。この2年間で、「LAP×talks」「菊地珈琲」などの様々な企画を計 12 回開催し、参加者は延べ 140 名を超えました。

「LAP×talks」という企画では、希望者 3 名がフリーテーマで伝えたいことを参加者にプレゼンし、その内容について参加者同士で対話をしていきました。参加者同士の交流が、発見や驚き、違和感やモヤモヤを生みだし、一人ひとりの気づきや学びを促していきます。例えばこれが「参加する面白さ」

です。

LAP の企画は、その準備から運営、広報まで、LAP メンバーが主体となって進めていきます。その過程では「楽」なことばかりではなく、むしろ一定の「大変さ」を伴います。実際のところ、「LAP×talks」ではゼロから企画をつくり始めたこともあり、2ヶ月半の準備期間を必要としました。ただ、その過程を経たことは「大変だったけど、達成感があった」という感想が出るくらい、LAP メンバーの満足感へとつながっているようでした。この感想が「つくる面白さ」なのだと思います。

運営スタッフのひとりである身としては、この「面白さ」を、ぜひいろんな人たちに感じてほしいと思います。さらに欲を言うなら、今の LAP を「超える面白さ」を新年度の LAP では、生み出していきたいです。



## ひとりメシの快樂



『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』  
(レイ・オルデンバーグ著；忠平美幸訳，みすず書房，2013)

中年になった今でも、ひとりで外食することにはやや抵抗があります。この抵抗を克服し、かみしめる味もまた格別ではあるのですが。焼き肉店こそ未だ近づけないものの、回転寿司くらいならひとりで立ち寄れるようになりました。カウンター席で隣合う他人の肩と衣擦れを起こしながら、しみじみと小皿を重ねていく。そんな自分をもうひとりの自分が俯瞰しながら、ひとときの淋しさをかみしめるのです。

近年、学食でひとりで昼食をとるのを恥ずかしがる学生が増えているそうです。トイレブースにこもって食べる学生もいるとのこと。真偽のほどはさておき、私にはその気持ちが痛いほどよくわかります。自慢じゃないですけど、大学時代の私もキャンパスからほど近い下宿まで、わざわざ昼食を食べに帰っていたくらいなので。

いったい、「ひとりメシ」を恥ずかしがる心性は日本人特有のものなのでしょうか。

たとえば、フランス人は概して「ひとりメシ」を恥ずかしがりません。それは、パリの街路に並んだカフェのテラス席がせせこましく配置されていることからわかります。立錫の余地もないくらい混みあったカフェでも空席が見つければ、フランス人は単身堂々と入り込みます。ひとり客なのに、まるで隣人と肩を組んでいるかのような近しさなのです。にもかかわらず、隣人同士は不干涉で「お互いの話を決して盗み聞き」したりしないそうです。「ひとりメシ」に関してこれほど一人前な国民を私は知りません。彼らはたぶん、「ひとりメシ」に興じる自分の姿を俯瞰したりはしません。我々が自宅のお茶の間で

団らんしているときそうしないのと同じように。そう、フランス人にとっては、街路のカフェがお茶の間そのものなのです、きっと。

『サードプレイス』の米国人の著者オルデンバーグは、自宅でも職場でもない第三の居場所の好例として、そんなパリのカフェの魅力と自国との差異について紙幅を割いて力説します。米国では「客は隣りと間隔をあけて座る。彼らの多くは前かがみになり、悲惨という見えない鉛の玉を膝の上で抱きかかえているかのようだ」。この一文から私がとっさにイメージするのは、確かに米国の深夜の食堂を描いたエドワード・ホッパーの名作『ナイトホークス』の殺伐たる光景です。

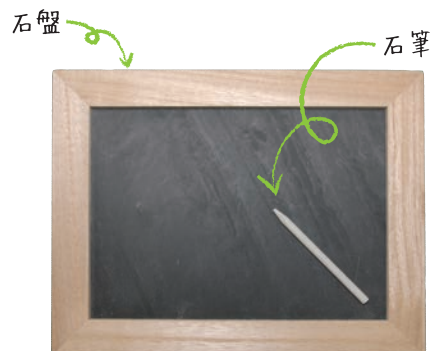
昨年10月に策定された附属図書館の理念は、「人が集い」という言葉で始まっています。ウェブを介した非来館型サービスの時代にそぐわないこの言葉には、ラーニングcommons PAOを中心に図書館という場のあり方をあらためて問い直していきたいという思いが込められています。図書館でありながら、グループ学習やゼミ、プレゼンテーションなど対話可能な空間であるPAOを、教室でも宿舍でもない第三の、とびきり居心地のよい場所にしていきたい。そして、願わくば、そのような知的ざわめきのなかにあっても、個人利用者が楽しみながら同居できる、そんなハイブリッドな空間であってほしいと考えています。ある図書館利用者が言ったように、図書館はひとりであることの孤独を癒す銭湯のような役割をも担っているはずだからです。

## 平成28年度前期展 「やっぱり大事!?ノート指導」展開催中!

平成26年度後期展で大好評だった「めざせ!板書の達人」展にて、  
熱いご要望をいただいた「ノート指導」企画が始まりました!  
ノート指導の重要性から実践例までわかりやすく展示しています。  
また、ノート指導に力を注いでいる教育現場の紹介や、  
様々なノートや文具の体験コーナーもご用意しています。  
一般の方も、学校教育関係の方も楽しめる企画となっております。  
多くの方々のご来館をお待ちしております。

### プチコラム

石盤(石板)と石筆って  
どんなモノ?



..... 教材文化資料館は、附属図書館のなかにある小さな展示室です。



『ヨミカタ学習帳』

京都市教育會編（昭和初期）

この学習帳は、当時の国語教科書の一節を書き写したり、かなの練習に使用していました。子どもの意欲を引き出す「花丸指導」をしていたことがうかがえます。



『師範教授小學生徒必携』 松川半山

（昭和57年（1982）／明治8年刊の複製） 雄松堂書店

学制の発布に合わせて、教師のための様々な教授書が出版されました。そのひとつである本書には、“「石盤に字の形を手本の如く書く」と教える”と書かれています。

- 【 会 期 】 平成28年4月1日（金）～8月31日（水）まで
- 【 開館時間 】 平日8:30～22:00、土日祝10:00～17:00
- 【 休館日 】 8月10日～15日、20日

※教材文化資料館は附属図書館内に併設しています。  
臨時休館等は附属図書館HPをご確認ください。  
附属図書館HP:<http://www.lib.hyogo-u.ac.jp>

【お問い合わせ】 教材文化資料館（平日9:00～17:00）  
TEL:0795-44-2362 FAX:0795-44-2364  
HP:<http://www.hyogo-u.ac.jp/museum/>

現在の小学校では、ノートと鉛筆を使っていますが、学制が発布された当時は、石盤と石筆を使っていました。石盤とは、粘板岩の黒くて滑らかな性質を利用し、薄い板に加工して、木枠をつけたもので、石筆は蠟石を加工して鉛筆状にしたもの。石盤に字を書いたり、計算練習をしたりし、書いた字は表面を布でなぞると消えたので、何度も使うことができました。ノートや鉛筆が十分に普及するまでは、石盤に石筆で筆記していました。

明治5（1872）年に小学校での教育内容などを定めた「小学教則」にも、綴字の授業では、児童は石盤に石筆で練習するよう明記されています。『小学教授連語図解』明治8（1875）年の登校風景の挿絵では、石盤をもって来ていることがうかがえます。明治後期から大正期になると、小学生が使う筆記具も、石盤と石筆からノートと鉛筆に代わっていきました。

# 附属図書館の理念及び行動指針

平成 27 年 10 月 21 日役員会 決定

## < 理念 >

兵庫教育大学附属図書館は、本学のミッション・ビジョンを遂行するため以下の理念を設定する。

兵庫教育大学附属図書館は、人が集い、知と実践が交差する、  
創造的で開かれた場として機能することにより、  
教員養成の高度化と学び続ける教育者の育成に寄与する。

## < 行動指針 >

上記の理念を実現するため、次の行動指針（4C）を設定する。

### （1）Collect

教育実践学及び教養向上に資する資料・情報を重点的に収集・整理するとともに、  
そのアクセシビリティの向上と利用促進を図る。

### （2）Connect

学生・教職員との連携・協働のもとに、人と本、人と情報そして人と人をつなぐ  
創意工夫を最大限に発揮し、知的で活気に満ちた学習コミュニティの醸成に努める。

### （3）Contribute

地域における生涯学習の一拠点として、市民に開かれた図書館となるとともに、  
本学における教育と研究の成果を学校現場はじめ広く社会に還元する活動に真摯に取り組む。

### （4）Challenge

大学や社会を取り巻く状況の変化に柔軟に対応し、学生・教職員のニーズを不断に  
捉えながら図書館の既成概念にとらわれない多様な学びの場づくりに挑戦しつづける。

## 編集後記

おかげさまで、本誌も創刊 10 周年。この節目に、思い切って誌面を  
リニューアルしました。サイズはややコンパクトになりましたが、こ  
れまでの年刊を年 2 回の発行に。4 月と 10 月にお届けします。

昨年 10 月に策定された附属図書館の理念。その実現に向け、今後も

図書館では様々な活動を展開するとともに、本誌を通じて、真面目  
に楽しく広報していく所存です。本誌に関して、ご意見・ご要望が  
ありましたら、ぜひお気軽にお知らせください。(F)

図書館事務室 E-mail : office-tosyo-r@hyogo-u.ac.jp